

りて南灣を擁す、南岬の東方に紅頭嶼あり。

西海岸と支那國との間は、即臺灣海峽にして、澎湖群島あり、其馬公港は碇泊に便にして、臺灣第一の良港と稱せらる。

本島の海岸線は凡二百八十里に過ぎず、これを九州の海岸線に比するに、其三分の一に及ばず、其稍出入多きは東北の小部分のみ。

東岸(太平洋沿岸)は斷崖にして、長さ九十餘里、海岸の附近にても海水甚だ深く、沿海諸山は水際より屹立す、西岸(臺灣海峽沿岸)は平地相連り、砂丘大に發達す。

氣候

(氣候) 本島の南端は北緯二十二度に達し、北端は全二十八度半に出でず、且温暖なる日本海流の本流は東方を流れ、支流は西方を洗ふを以て、氣温高く、雨量も亦尠からず、北

臺北基隆共に
氣候不良なり
特に基隆を甚
しとす

部は氣候屢變じ、健康を害することあるも、南部は寧ろ衛生に適せりといふ、風向は夏季に西南風多く、冬季に東北風多し、夏秋の交には颶風本島の東岸を襲ひ、全島を經過して内地に入る。

北部は溫帶の氣候なり、冬期には雨多く、風は東北風多く、氣候比較的に寒冷にして、往々降雪を見ることあり、南部は熱帶の氣候なり、一年平均の温度、北部より高きも、夏期は多雨にして、西南風と共に驟雨來ること多く、稍炎熱を洗ふといふ。

人種

(人種) 住民は支那人と蕃人とに別ち得べし、支那人は福建、廣東地方より移住せるもの多く、風俗支那本部のものに異ならず、蕃人は舊時生蕃、熟蕃の二種に分ちたり、これ熟

蕃は支那人と雜居し、御し易く、生蕃は山中に住み、制し難かりしものを云ひたれども、現今は此區別の必用なし、蕃社は凡一百四ありて、人口大約三十万なるべし。

交通

(交通)

本島の交通は甚だ不便にして、道路と稱すべきもの稀なり、今其重要なるものを擧げんに、一は臺北より彰化、嘉義を経て、臺南及鳳山に至るもの、一は臺北より基隆を経て蘇澳に至るもの、一は鳳山より東港を過ぎ、卑南に至り水尾に達するもの等に過ぎず。

鐵道は臺北より東方基隆に至るものと、西南新竹に至るものごあり、延長僅に六十哩に過ぎず、構造甚だ不完全なり。沿海の航行は風波荒きと、港灣の不良なるに由り、危険尠からずと雖も、西岸は支那の海岸を距ること遠からずして、稍便利なり。

北部

北部。(臺北縣宜蘭廳)

内地より臺灣に航すれば、先づ基隆港に達すべし、港内水

深く、大艦を泊するに足るも、東北風は凌ぎ難し、本港は開港場の一にして、石炭を輸出す、此地より臺北に通ずるには鐵道の便あり。

基隆より宜蘭平原を経て、宜蘭に至る、此地は宜蘭廳の所在地なり、其南方なる蘇澳港は、特別輸出港の一にして、港内廣らざれども、水深く、碇泊に便なり。

臺北(人口五万一千)は臺灣總督府及臺北縣廳の所在地にして、府城は近年の築造に係る、城内清潔にして、家屋の概ね二層なり、艋舺は府城の西南、淡水河岸にありて、商店多し、北方に大稻埕あり、製茶盛んに行はれ、烏龍茶の名高し、大姑陷は淡水溪の上流にあり、茶の産出多し。

淡水港は又滬尾と稱し、臺北の北に當る、淡水河口にあ

り、其廣さ半里許、港口に砂洲ありて大艦を入る、こと能はず、本港は主として、茶、石炭、樟腦、砂金等を輸出し、綿布類、鴉片、毛布、金屬器等を輸入す、海底電線は此地より支那福州に通ず、これより南に新竹あり。

西部

西部。(臺中縣、臺南縣)

新竹より南方の海岸は、屈曲に乏しく、良港を見ず、唯後壠溪河口に後壠港あり、特別輸出港の一に數へらる、後壠溪の中流に苗栗あり、樟腦の製造盛んなり。

臺中は臺中縣廳の所在地にして、もと臺灣府と稱し、支那領の時一旦首府を置きしところなり、其西方に彰化あり、其海岸なる鹿港は、特別輸出港の一にして、主として樟腦を輸出す、埔里社は彰化の東に方れる山中の溪間にあり。

彰化より南に、嘉義あり、更に西南二十里にして臺南あり、人口四万五千、本島有数の大都にして、臺南縣廳の所在地なれども、市街清潔ならず、其西北一里餘に安平の要港あり、重なる輸出品は、砂糖、樟腦、米等にして、輸入品は阿片、棉布、毛布類なり、海底電線は本港より澎湖島に通ず。

臺南の南に當りて鳳山あり、其西南の打狗港タカオ港は港口狭く、水深からず、雖も、古來貿易盛んにして、砂糖を輸出す、其南方下淡水溪の吐口に東港あり、又特別輸出港の一なり、恒春は南端に近き一小都會にして、其西に社寮港あり。

東部

東部。(臺東廳)

東部は一般に山岳縦横に亘り、海岸は良港に乏しく、殊に北方の險崖は水面より直立七千尺に至るものあり、要する

に本部は所謂生蕃地にして、専ら蕃族住居し、未だ詳細の事實を知ることは能はず。

本部にて主要なるものは、水尾及卑南ヒナムにして、水尾は秀枯溪の上流にあり、現今臺東廳の所在地なり、卑南は恒春の北約三十五里に在り、卑南大溪の平野は甚だ廣く、四十六蕃社あり、嘗て琉球人の漂着せしを虐殺したる、牡丹社は此蕃社の一なり。

澎湖群島。(澎湖廳)

澎湖群島は臺灣海峽の中央に位し、東海の門戸を扼す、群島は大小五十餘の島嶼より成り、就中澎湖島(大山嶼)、北海島(白砂島)、漁翁島、西嶼、最も大なり。

澎湖島と漁翁島とは相對して大灣を擁す、これを澎湖港

澎湖群島
澎湖島は火山
岩一面に之を
掩ふ但し噴火
口なし

こいふ港内水深く無比の良港なり、澎湖島の西南部に馬公港(媽宮港)あり、特別輸出港の一にして、船舶の碇泊に便なり、媽宮城は北岸にありて澎湖廳あり。

産業

(産業)

本島は地味肥沃にして、北部は主として茶を産し、南部は砂糖の製造盛んなり、米の産額又多くして、年二回、處によりては三回の收穫あり、中央の山地よりは盛んに樟腦を出し、其他麻、落花生、藍、烟草、鳳梨等の農産物あり。

鑛物は硫黄、砂金、石油等にして、石炭は基隆地方に多し。動物の種類は内地に類似す、豚は其數甚た夥しく、食用に供せられ、水牛は専ら農事に使役せらる、其他鹿及豹の類尠からず。

植物は熱帯性のもの多く、樟の外、竹、松、杉、杪、椴、榕樹、椰樹、檳榔樹等繁茂す。

漁業は西岸沿海に盛んにして、鱈、鰯、鱸、鯖、鰹、鰈、鰒等の漁獲く、牡蠣の産額も亦大なり。

後 篇 總 論

第一章 天然地理

(位置)

我大日本帝國は、亞細亞大陸の東部、太平洋中にありて、東北より斜に西南に亘れる列島より成る。本州其中央に位し、北に北海道、西南に四國、九州あり、東北は千島列島によりて、オヨツク海を限り、千島海峽を以て、ロシア領のカムチャツカと界し、宗谷海峽を挟みて、其樺太島を望む。西南は琉球諸島と臺灣島とによりて、スペイン領のフィリピン諸島に對し、東海と臺灣海峽とを以て、支那と相望む。西北は日本海を隔て、シベリアに對し、朝鮮海峽によりて、朝鮮に向ふ。東南は豆南諸島及小笠原諸島によりて、遙に大洋州の

位置
境界

日本は海國なり

マリアナ群島に對す。

極西は澎湖島、花嶼の西端、東經百十九度二十分より起り、極東は千島シユムシユ島の東端、東經百五十六度三十二分に至り、極南は臺灣ベールレート列岩の南端、北緯二十一度四十五分に起り、極北は千島アライト島の北端、北緯五十度五十六分に終り、大率北温帶内にあり。
樺太島(サガレン島)はもと我國の領地なりしが、明治八年、千島列島中ウラルツプ以北の諸島と交換して、ロシアに與へたり。

廣袤

(廣袤) 我國は大小二千有餘の島嶼を有し、周回凡七千三百餘里にして、面積凡二万七千六十二方里あり、長さ凡一千三百里、幅最も廣き所は百里に垂んとす。

本州は帝國全面積の十分の六を占め、北海道は本州の三分の一に當り、九州は本州の六分の一、北海道の二分の一に當る、四國は九州の二分の一に相當し、臺灣は約ね九州に等し。

海岸線

(海岸線)

凡て國の面積に比して、其海岸線の長短は、

我國は海岸線の關係に於て文明國たるべき資格を有す

其國の隆盛に赴く、否らざるに關すること大なり。我國は海岸の屈曲頗る甚しきを以て、海岸線甚だ長く、其延長七千餘里に及ぶ。而して北海道、四國、臺灣は、比較上、海岸の屈曲稀少なれども、本州の西南岸と九州の西岸とは、出入極めて多し。

太平洋沿岸は、日本海沿岸の二倍の長さをも有す。四國は臺灣に比し、面積凡二分の一なれども、海岸線は却て二倍以上なり、九州は北海道に比し、面積小なれども、海岸線は却て長し。

港灣

(港灣)

我國の海岸線は斯の如く長きが故に、出入も亦多しと雖も、天然の良港灣多からざるは惜むべきなり。而して日本海沿岸にありては殊に然り、即ち太平洋の面には、噴火灣、仙臺灣、東京灣、駿河灣、伊勢灣、大阪灣、鹿兒島灣、筑紫洋等數多あれども、日本海の方には、若狹灣、富山灣、小樽灣等の二

太平洋沿岸諸國の日本海沿岸諸國に優る所以

三あるのみ。

噴火灣には森室蘭あり。仙臺灣には萩、濱石、卷、鹽釜あり。東京灣には横濱、横須賀あり。駿河灣には清水、伊勢灣には四日市、半田あり。大阪灣には大阪、神戸あり。鹿兒島灣には鹿兒島、筑紫津には口津、三角等の有名なる港あり。

敦賀灣に於ては敦賀、富山灣に於ては伏木、小樽灣に於ては小樽、稍名あり。其他有名なるものには、北海道に於て函館あり、日本海に於て佐渡の夷能登の七尾、隠岐の西郷、對馬の竹敷、嚴原、九州に於て長崎、唐津、博多あり。本州に於て宇品、吳、下關、舞鶴、宮津、直江津、新潟、下田、鳥羽等あり。臺灣に於ては、海岸の出入少なきを以て、良海と稱すべきものなし。但し北部の基隆、東部の蘇澳あり、西部の淡水、安平、打狗稍々名あり。但澎湖諸島にありては、極めて海岸の屈曲に富み、諸島相擁して澎湖港の一大良港をなせり。

海峡

（海峡） 海峡は、交通及國防上に、重要な關係を有す、茲に重なるものを列擧すれば、左の如し。

- 宗谷海峡 千島海峡 根室海峡 津輕海峡 鳴門海峡
- 由良海峡 明石海峡 豊後海峡 馬關海峡 大隅海峡
- 朝鮮海峡 臺灣海峡 バシー海峡

島嶼

（島嶼） 我國の島嶼は頗る多し、左に列擧するは、其著しきもののみなり。

- 千島列島 アライト島 シニムシユ島 バラモシリ島
- オンチゴタン島 シヤスコタン島 シムシル島
- ウルツブ島 エトロフ島 シコタン島
- クナシリ島
- 北海道 オクシリ島 レブンシリ島
- 本州 豆南諸島 大丈島
- 小笠原群島 父島
- 瀬戸内海諸島 淡路島 因ノ島 大崎島
- 倉橋島 能美島 大島
- 隠岐諸島 中ノ島 西ノ島

半島

ば左の如し。

(半島)

半島の大なるものは稀なれども試に列挙すれ

- 能登島
- 佐渡島
- 四國
 - 小豆島
 - 鹽飽諸島
 - 大島
 - 伯方島
 - 大三島
- 九州
 - 櫻島
 - 種子島
 - 屋久島
 - 長島
 - 飯列島
 - 上飯島
 - 下飯島
 - 天草諸島
 - 大矢野島
 - 上島
 - 五島列島
 - 中通島
 - 奈留島
 - 福江島
 - 平戸島
 - 大島列島
 - 大島
 - 徳ノ島
- 壹岐島
- 對馬島
 - 上ノ島
 - 下ノ島
- 琉球諸島
 - 沖繩群島
 - 沖繩島
 - 先島列島
 - 宮古島
 - 石垣島
 - 西表島
- 臺灣
 - 澎湖諸島

岬角

(岬角)

我國は海岸の屈曲甚しきを以て岬角の數亦頗る多し。今其主要なるものを左に掲げん。

- 北海道
 - 知床半島
 - 花咲半島
 - 渡島半島
- 本州
 - 斗南半島
 - 牡鹿半島
 - 房總半島
 - 伊豆半島
 - 渥美半島
 - 知多半島
 - 志摩半島
 - 兒島半島
 - 能登半島
 - 男鹿半島
 - 津輕半島
- 九州
 - 國東半島
 - 大隅半島
 - 薩摩半島
 - 島原半島
 - 彼杵半島
- 臺灣
 - 恒春半島
- 北海道
 - 宗谷岬
 - 知床岬
 - 納沙布岬
 - 襟裳岬
 - 惠山岬
 - 鹽首岬
 - 矢越岬
 - 白神岬
 - 辨慶岬
 - 神威岬
- 本州
 - 積丹岬
 - 高島岬
 - 大間岬
 - 尻屋岬
 - 犬吠岬
 - 野島崎
 - 觀音崎
 - 石廊崎
 - 御前崎
 - 潮岬
 - 珠洲岬
 - 龍飛岬

四國	——	蒲生田崎	室戸岬	嵯陀岬	佐田岬
九州	——	鶴見崎	都井岬	佐多岬	開闢岬
臺灣	——	富基角	三貂角	南岬	西南岬
					野間岬

地勢

二大山脈

三大火山脈

此國は太平洋沿岸火山脈に屬し火山の分布は夥多なり

(地勢) 我邦は斜に彎曲して恰も弓形をなし其凸面は太平洋に向ひ凹面は日本海を擁して亞細亞大陸に對す。これ即ち我地體を構成する所の崑崙樺太二大山系の方向に依るものにして其相會するところは本州中幅員最も廣く地勢極めて高峻なり。

此二大山系の外に三大火山脈あり富士帶霧島帶千島帶これなり。富士帶は中部を横ぎり霧島帶は西南に連り千島帶は東北に現はる。本邦の地勢は専ら此二大山系と三大火山脈との支配する所なり。

二大山系の日本海に面する山脈と太平洋に面する山脈とを比較するに甲は火山に富み地層混雜すれども乙は火山極めて少く地層稍整然たり。因て日本海に面する方を内帶と名づけ太平洋に面する方を外帶と名づく。

山系

(山系)

帝國の山脈は既に述べたる二大山系より成る、左にこれを畧述せん。

崑崙山系
地方

崑崙山系地方は、亞細亞大陸なる支那崑崙山脈の餘波を受けて、畧ぼ西より東に連れるものなり。其外帶山脈は九州南部山脈をなし、一たび豊後海峽に没して、又四國山脈と成り、再び紀伊水道に沈みて、又紀伊山脈を起し、三河の南部を経て赤石山脈と連る。崑崙山系の内帶山脈は九州の北部に起り、山陰山陽兩道の境に出で、中國山脈を成し、濃飛高原に至りて飛驒山脈をなし、別に南の方木曾山脈をなせり。

鈴鹿山脈、笠置山脈、葛城山脈も亦内帶の崑崙山系に屬す。

霧島帶

霧島帶は琉球諸島に起りて九州に入り、開聞岳、櫻島岳等を起して、霧島山に連り、稍西北に折れ、温泉岳、多良岳に終る。

霧島帶の外に又阿蘇火山脈、白山火山脈、能登火山脈等あり。

樺太山系
地方
千島帶火
山脈

樺太山系地方は樺太島と通するものにして、略ぼ南北に連亘し、北海道にては日高山脈、東北山脈は此山系に屬す。千島帶火山脈は知床岬より、中央部に走り來りて、樺太山系を横ざる。又噴火灣の沿岸に火山脈あり、本州にては北上山脈、阿武隈山脈、足尾山脈、關東山脈等は、外帶の樺太山系に屬し、中央分水山脈及陸奥山脈等は、内帶の樺太山系に屬す。

富士帶

本邦最大の火
山脈

富士帶は其脈遠く太平洋より來り、小笠原群嶋、豆南諸島を経て、伊豆半嶋を通じて北走す、彼の白扇倒に懸れる富士の秀峰は、實に此脈の盟主たり。

シルグイア山
脈新高山脈

臺灣には中部より西南に走れるシルグイア山脈と、其西に連なれる新高山脈あり、而して支那又は本州の山脈と如何なる關係あるかは、未だ詳ならず。

地震

天然地理

一九六

本邦は世界有名なる火山國にして又有名の地震國なり、微震をも通算するときは殆んど日ごとしてこれなきはなし。本邦地震の原因は二種あり、一を火山地震といひ、火山破裂の爲に近傍の土地震動するものにして、其區域狭く、其數亦少し、明治二十一年七月十五日、磐梯山破裂の時の地震は、即ちこれなり。一を地竈地震といひ、地層の竈り落つるが爲に震動するものにして、其區域最も廣く、其數亦多し、明治二十年十月二十八日の濃尾大地震は此種に屬す。

水系

分水區域

(水系) 我國は地形狹長にして、山岳急峻なれば、水流は夥しと雖も、多くは山腹を直走する細流に過ぎず。彼の大陸に於て見るが如き、河道廣濶にして、航通の便と運輸の利とを與ふる大河をなすこと能はず。今水理の方向により、便宜

上分水區域を五部に分つ。

(一) オコツク海斜面區域。樺太山系と千島帯とによりて限られ、オコツク海に向ひ傾斜する水域なり。

此區域にあるものは、勇別川、常呂川等なり。

(二) 太平洋斜面區域。北海道にては千島帯及渡島山脈により、本州にては中央分水山脈、飛驒山脈等、四國にては四國山脈、九州にては九州南部山脈によりて限られ、太平洋に向ひ傾斜する水域なり。

北海道の釧路川、十勝川、本州の北上川、阿武隈川、利根川、富士川、天龍川、木曾川、紀伊川、四國の吉野川、仁淀川、四万十川、九州の五箇瀬川、美々津川、大淀川等は此區域にあり。

(三) 支那東海斜面區域。九州南部山脈の一部と阿蘇火山脈とによりて限られ、支那東海に向ひ傾斜する水域なり。

五區中最も大なるもの

山脈に沿ふ川は長く然らざるは概ね短し

天然地理

一九七

此水域に属するものは、川内川、球摩川、筑後川等なり。

(四) 日本海斜面区域。九州の北部より北海道宗谷海峡に至る間の日本海に向ひ傾斜する水域をいふ。

九州の遠賀川、本州の江川、射水川、神通川、信濃川、阿賀川、最上川、御物川、能代川、岩木川、北海道の石狩川、天鹽川は此區域にあり。

(五) 瀬戸内海斜面区域。瀬戸内海に向ひ傾斜する本州、四國、九州の部をいふ。

此水域に属するものは、本州の大和川、淀川、東大川、西大川、太田川、四國の肱川、九州の大野川、驛館川、山國川等なり。

臺灣の水系は臺灣海峡の斜面と太平洋の斜面との二つに分る。

湖沼

湖沼の生成する原因には種々あり、我邦にて最も多きは火山の舊噴火口に水の溜りしものご、海岸に打ち寄せたる土砂のために、縁を造りて澤湖となりしものと、内海或は灣

に近き陸地の隆起して、終に其内海又は灣の湖に變じたるものごなり。又地皮の陷落して、凹所に水を溜め、湖水となりしものもあり、火山噴出物等の溪流を堰き止めて、湖をなしたるもあり、大きに依りて、これを記せば、琵琶湖最大にして、霞浦、猿澗湖、猪苗代湖、八郎潟、中海、風蓮沼、尖道湖、印旛沼、十和田湖等これに次ぐ。

氣候

(氣候) 氣候は緯度、地勢、海流等の差異によりて變化す。

本邦は北緯二十一度五十四分の熱帯より、五十度五十六分の温帯に亙り、地勢頗る變化に富み、加ふるに南日本の海岸は暖流に洗はれ、北日本の海岸には寒流流れ来るを以て、氣候の變化少からず。而して西北には大陸を控へ、東南は太平洋に臨み、山脈中央に連亘するを以て、雨雪多し。夏季には南

我國の氣候は多様なり

風或は東南風、太平洋より多量の濕氣を送り、九州、四國の南部、及紀伊の南端、並に東海道沿岸降雨多し。冬季はこれに反して、北風或は西北風、日本海の濕氣を齎し來るにより、北陸、山陰兩道の地降雪甚し、唯北海道及瀬戸内海沿岸は降雨、降雪共に多からず。

氣温

冬季の温度は、九州の南端より、犬吠岬に至る海岸の地は大差なし、これに反して、犬吠岬より北海道根室に至る間は、差異甚し。

日本海沿岸にありては、長崎より宗谷に至るまで、其差外帶の如く甚しからず、又北海道の上川に於ては、最低温度零度以下三六、七に及ぶことあり。

夏季(八月)の温度は概して冬季の如く差異甚しからず、特に九州の南端より、犬吠岬に至る海岸の地は、暑ぼ一様にして、二七と二五との間にあり、此季節には上川に於ても三五に達することあり。

臺灣にありては夏季の温度は差異少けれども、冬季の温度は南部と北

颶風

部との差異頗る甚し、これ北部は冬季黄海より來る寒流の影響を受くるを以てなり。

九月上旬より中旬の間には、颶風吹き來るを常とす、古來より陰曆二百十日、二百二十日の厄日と稱するものこれなり。其本は通常フィリッピン群嶋邊より始まり、東北に進み、九州、四國を過ぎ、斜に本州を吹きて北海道に及ぶ。

霖雨は六月頃に降る、陰雨濛々連日開けざるを常とす。暴雨は九月頃に起り、常に颶風に伴ふ。

海流は著しく本邦の氣候を左右す、抑も本邦沿岸には寒暖の二流あり、暖流は日本海流即ち黒潮にして、臺灣島の東に起り、琉球諸島に沿ひて北に流れ、宮古島の北方にて一支流を分つ。本流は九州、四國の南岸を洗ひ、進みて豆南諸嶋に

霖雨

霖雨は梅雨五月雨又は微雨と稱し、大約三十日に亘る。

海流

暖流

達して、御倉嶋、八丈嶋間の黒瀬川となり、犬吠岬の沖より、漸く本州を離れて、遠く太平洋中に去る。支流は對馬海流と稱し、九州の西岸に沿ひ、對馬海峽を経て日本海に入り、津輕海峽に達し、再び二派に分れ、一は更に宗谷岬に進み、他は津輕海峽を過ぎて太平洋中に隱る。

寒流

寒流には三派あり、千嶋海流、樺太海流、ライマン海流これなり、千嶋海流即ち親潮のカムチヤツカの近海に發し、千嶋列嶋の間を過ぎて二分し、一は宗谷岬に至り、一は北海道の東岸より、本州の犬吠岬附近に至る。樺太海流は樺太嶋の東岸に沿ひて南流し、宗谷岬に近づき、ライマン海流は東部亞細亞の海岸に沿ひ、對馬附近に至る。

黒潮は氣候によりて多少其位置及温度を變し、其速度を異にす、此暖流

の通過する近海は鯉鰯等の魚類多し。

親潮も亦季節によりて、多少其位置、速度及温度を變ず、昆布は此寒流の通過する海中の産物なり。

暖寒二流の衝突する所には、海霧を見ること多し。

天産

(天産) 我國は熱帶、溫帶に跨り、高山聳え、海洋繞り、雨量多く、地味肥沃なるを以て、天産甚豊なり。

植物

植物は寒、温、熱、三帶のものを併せ有し、其種類極めて夥しく、到る處に森林鬱蒼たり、今其分布を左の諸帶に區別せん。

(一) 熱帶樹帶は臺灣、琉球諸嶋、小笠原諸嶋を首とし、九州及四國の南端を含む、本帶は最も甘蔗に適し、蘇鐵、樟樹、榕樹等生育す。

(二) 半熱帶樹帶は熱帶樹帶の北にあり、九州、四國の全部、中國、畿内、紀伊、及其以東太平洋に面する地方の南岸、並に中國より能登に至る諸國の北部これに屬す、最も茶樹の栽培に適し、松柏類は森林をなし、山茶、樟樹、蜜柑等多く生育す。

(三) 温帯低地帯は北緯三十五度以北即ち半熱帯樹帯以北より本州の北端に達する低地を包含す。稻作の良境にして、松柏類にも適し、櫻、杉、松、楓、柏、椴、樺等多く繁殖す。

(四) 温帯高地帯は九州、四國、紀伊の高山を首とし、本州中央部の高地、及越中、越後の高地を含む。山毛櫸最も多く、麥及荳類能く生育し、檜の如き針葉樹多し。

(五) 高山帯は富士山の山頂、赤石、木曾、飛騨、三國山脈及分水山脈の諸高峰にして、特有の植物には羅漢松、ツガ、偃松等あり。

動物

動物は植物の如く其區域判然たらざれども、温帯性のもの全國到る處に産し、南方には熱帶性及温帯性のもの多く、北方には温帯性のもの減じて、寒帯性のもの増加す。

南方の陸産には、猿、毒蛇、鹿、兎、狐の類多く、海産には太平洋に鯉、鰻、鮪、牡蠣、イワシ、サメ、ウナギ、カサガシ、日本海に鯛、烏賊等多し。

北方には熊、狼、鱈、鮭、鱒等多く、千嶋は紅鯨、海獺、海豹、膾、膾、膾の類多し。

礦物

礦物中有用にして産額多きものを擧ぐれば銅及石炭を第一とし、金、銀、鐵、硫黃、安質母、尼、滿、俺、石油、石灰石、水晶等々之次ぐ、外に花崗石等の建築石材あり。

第一章 住民

種族

大和民族

大和民族は恰も一團の家族の如し

アイヌ種は古昔本州の中央以東にも住居せり

琉球種

移住支那人

蕃人

(種族) 我日本民族は世界の五人種中モンゴリア人種に屬す。一般に皮膚黄色にして、頭丸く、顔は平にして、頬骨出で、毛髮黒く、鬚髯多からず。本邦土着の人民は所謂大和民族にして、言語風俗習慣思想を一にし、二千五百餘年、列聖の鴻恩に浴し、忠勇武烈の精神に富む。

大和民族の外にアイヌ種族あり、昔は大に繁殖せしも、今は北海道の一部に屏居す。

臺灣には支那より移住せしものと、蕃族とあり。

琉球種族は大和民族に似たれども、少しく異なる點あり。

アイヌ種族は鬚髯長く、全身毛多く、風俗習慣大に異れり。

我國民は古來質素なりしに、近來稍華美を好む風あり。

衣食住

四族

普通人民の衣服は概ね綿布にして、富者は絹布、毛織物、麻布等を用ふ。食物は米麥等の穀物及野菜を主とし、近來肉食するもの漸く増加せり。家屋は概ね木造にして、都會には煉瓦造を見る、日本風、西洋風及和洋折衷等の別あり。

我國人は頗る優美の風ありて、機敏の性を備ふ、然れども稍事に倦み易き缺點あるは患ふべき事とす。

我日本民族には皇族華族、士族及平民の別あり。

皇族は歴代天皇の御血統なれば、尊嚴にして犯すべからず。

華族は歴世皇室に直隸せし名族、維新前各地方に分封せられたる舊諸侯、並に國家に勳功ありて、新に爵位を賜はりたるものなり、現今尙政治上に多少の特權を有し、社交上の位置も稍士族及び平民に異なれり。

士族は維新以前舊諸侯に隸屬せしものにして、所謂武士なるものなり。平民はもと農工商の業務に従事し、士班に列せざりし多數の民庶をいふ。

人口

(人口)

人口は近來益々増殖の機運に向ひ、年々増加の

我國は人口の増殖著しき國の一なり

人口の疎密

住民

二〇八

割合凡四十三万人なり。明治二十九年末の調査に依れば四千二百七十万餘にして、これに臺灣の人口凡三百万を加ふれば實に四千五百餘万とはなるなり。

我國は世界中人口稠密なる國の一に居り、ベルギー、オランダ等を除くの外能く及ぶものなし。

今各地人口の疎密を見るに左の如し

人口(二十九年末調査)	方里	一方里ニ付
畿内	二、六三七、三四六	四四五
東海道	九、八四〇、二三一	二、六五八
東山道	四、四〇六、一三九	二、六〇二
舊奥羽	四、七〇四、六五九	四、二四七
北陸道	三、八八八、六五五	一、五七七
山陰道	一、八四〇、二七六	一、〇八七
山陽道	四、二四二、八八三	一、五七〇
南海道	三、六九三、一九八	一、五六一
西海道	六、〇九三、七六九	二、六一七
北海道	五〇八、八七〇	六、〇九五
佐渡	一一三、七二〇	五六
隱岐	三五、〇七一	二一
淡路	一九〇、七七一	三六
壹岐	三六、一五七	八
對馬	三三、二二六	四四
琉球	四四〇、八八九	一五六
小笠原島	二、四〇四	四
總計	四二、七〇八、二六四	二四、七九四

教育

(教育)

維新後朝廷學制を發布し、大に教育を獎勵し給ひしにより、大小の學校盛に起り、學齡兒童にして就學せざる者は、唯十分の三餘となれり。高等教育には東京及京都に

住民

二〇九

帝國大學ありて、法、醫、工、文、理、農の六科に分つ、又學術の蘊奥を究むるために大學院を設く。北海道の札幌農學校は、農科大學に準ずる専門大學校なり。高等學校は東京、仙臺、京都、金澤、熊本及山口の六ヶ所にありて、中等以上の業務に就かんごするもの、及大學に進むもの、階梯となす。陸海軍士官を養成するには、陸軍大學校、海軍大學校、陸軍士官學校、海軍兵學校等あり、教員を養成するには、東京に高等師範學校及各府縣に師範學校の設あり、又府縣に中學校あり、小學校は其數凡二万七千餘校あり。其他公私の設立に係る法律、商業、工業、農業、音樂、美術等の専門學校、高等女學校等枚舉に遑あらず。

本邦の書籍館及博物館は、其數尙少けれども、帝國圖書館、東京帝國博物

文事

美術

奈良京都等に
遊び見よ

狩野派土佐派
南畫浮世繪等
畫法

宗教

神道

館、帝國京都博物館、帝國奈良博物館等は、政府の管理に屬し、規模稍大なるものなり。

教育の進むに従ひ、著書及新聞雜誌等の發行も、亦年々増加するを見る。即ち圖書の發行せらるゝもの、毎年二万五千部に達し、定時發行の新聞雜誌凡八百種、一ヶ年の發行部數四億に及ぶといふ。

我國の美術は、其淵源遠く三韓交通の昔にあり、後佛法の傳來と共に、佛畫、佛像を製作建立する技術大に發達し、次で支那、隋唐、明の時代に至り、又彼國の畫風を傳へて、多少の變遷あり、遂に一種獨得の日本畫法を發明す。其他陶磁器、漆器等の技術も亦大に發達し、本邦美術の名海外に高し。

(宗教) 本邦に於て宗教と見るべきもの三あり、神道、佛教、基督教これなり。神道は祖宗の威靈を祭祀し、又は國家に勳功ありたる、武將若くは賢哲を崇拜するものにして、別に

佛 教

經典と稱すべきものなく、稍他の宗教と趣を異にす。佛教は欽明帝の朝初めて傳はりて、幾多の盛衰ありしと雖も、明僧知識を出せしこと少なからざるを以て、現今尙多くの信徒を有す。

基 督 教

基督教は後奈良帝の朝渡來し、一時全國教徒の數三十万に達せしも、其後國禁となり、公には殆んど信するものなかりしが、維新後漸く行はれて、教徒は開港場及關東に多し。

現今伊勢神宮を初めとし、熱田神宮、出雲大社、湊川神社、琴平神社等の官幣社、國幣社の數百六十七、府縣社の數四百八十六、其他の鄉村社及無格社十九万餘にして、神職の數一万五千人許あり。

佛教には天台、眞言、淨土、臨濟、曹洞、黃檗、眞法華、時融、通念佛、法相、華嚴の十二宗あり、東西兩本願寺、知恩院、延暦寺、高野山、身延寺等の有名なる寺院を合せ凡七万二千、外に境外佛堂三万八千餘あり、住職の數五万六千餘人あり。

我邦に傳道せる基督教には、三大派あり、天主教(羅馬教)、正教(希臘教)、新教(プロテスタント)とす、東京にはニコライ會堂、中央會堂等有名なる教會堂あり。

第二章 政治

政體

(政體) 政權一たび武門に移りしより、大小の諸侯國々を分領し、久しく封建の制度なりしが、明治元年、徳川幕府大政を朝廷に奉還し、同二十二年に至り、帝國憲法を欽定せられ、同二十三年、帝國議會の召集となり、立憲政治の形體成りて、立法、行政、司法の三大機關全く備はる。

統治權

天皇は國の元首にして、統治の大權を總攬し給ふ。百般の政務は、國務大臣輔弼し奉りて、其責を任じ、立法は概ね帝國議會の協賛を要し、司法權は天皇の名に於て、裁判所これを行ふ。

帝國議會

(一) 帝國議會は貴族院、衆議院より成る。貴族院は貴族院令の定むる所に

より、皇族、華族及び勅任せられたる議員を以て組織す、其數凡そ三百人あり。衆議院は選舉法の定むる所により、各府縣に於て公選せられたる議員を以て組織す、其數凡そ三百人あり。

行政部

(二) 行政部は内閣及外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信の九省あり、各省に主務の大臣ありて、内閣總理大臣これを統一す。

地方には道廳に長官、府縣に知事ありて、主務大臣の指揮監督を受け、部内の政務を行ふ。道廳、府縣は又これを小分して市、區、郡とす。市、區、郡には各其長あり、又郡は更に細分して町村となす。町村にも各其長あり、須要なる島地には、特に島司を置きて支配せしむ。

司法部

(三) 司法權を行ふ裁判所には區裁判所、地方裁判所、控訴院及大審院の四級あり。大審院は最高裁判所にして、東京に唯一あり。控訴院は七にして、東京、大阪、名古屋、廣島、長崎、仙臺、函館にあり。地方裁判所は各府縣に各一、北海道に三あり、區裁判所は最下級にして、三百餘あり。

臺灣には、天皇の親任せられたる臺灣總督ありて、これを支配す。總督府は臺北に在り、地方には縣及廳を置き、縣に知事、廳に長を置き、部内の政務

を行はしむ。

又別に宮内省あり、宮内大臣これが長官となり、帝室の事を掌る、樞密院は天皇の最高顧問府なり。

區劃

(區劃) 全國を畿内八道に分ち、更にこれを八十四國に分ち、琉球、臺灣は此外なり。

- (一) 畿内 五國 山城、大和、河内、和泉、攝津、
- (二) 東海道 十五國 伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、
- (三) 東山道 十三國 近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後、
- (四) 北陸道 七國 若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、
- (五) 山陰道 八國 丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、
- (六) 山陽道 八國 播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長

行政區劃

普通行政の區劃は、専ら其時の便利に従ふを以て、これを變更することなきにあらず、現今は北海道及び三府、四十三縣となれり、臺灣は此外にあり。

- (七) 南海道 六國 門、紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐、
- (八) 西海道 十一國 筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、
- (九) 北海道 十一國 渡島、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十勝、釧路、根室、千島、

・古來關八州と稱するは、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野にして、又これを關東と呼ぶことあり、東山道の中、近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野の六國を中仙道と稱し、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の七國を、奥羽或は東北地方といふことあり、又山陰、山陽の兩道を合せて、中國とも稱す。

區劃名 官廳所在地

管轄區域

北海道	札幌區	北海道
東京府	東京市	武藏の内一市八郡伊豆七島小笠原島
京都府	京都市	山城丹後丹波五郡
大阪府	大阪市	河内和泉攝津の内一市四郡
神奈川縣	横浜市	相模武藏の内一市三郡
兵庫縣	神戸市	播磨但馬淡路攝津の内一市三郡丹波の内二郡
長崎縣	長崎市	壹岐對馬肥前の内一市六郡
新潟縣	新潟市	越後佐波
埼玉縣	浦和町	武藏の内九郡
千葉縣	千葉町	安房上總下總の内六郡
茨城縣	水戸市	常陸下總の内三郡
群馬縣	前橋市	上野
栃木縣	宇都宮市	下野
奈良縣	奈良市	大和

三重縣	津市	伊勢伊賀志摩紀伊の内二郡
愛知縣	名古屋市	尾張三河
静岡縣	静岡市	遠江駿河伊豆七島を除く
山梨縣	甲府市	甲斐
滋賀縣	大津市	近江
岐阜縣	岐阜市	美濃飛驒
長野縣	長野市	信濃
宮城縣	仙台市	陸前の内一市十三郡磐城の内三郡
福島縣	福島町	岩代磐城の内七郡
岩手縣	盛岡市	陸前一郡陸中の内一市十七郡陸奥の内一郡
青森縣	青森市	陸奥の内二市八郡
山形縣	山形市	羽前羽後の内一郡
秋田縣	秋田市	羽後の内一市八郡陸中の内一郡
福井縣	福井市	若狹越前
石川縣	金澤市	加賀能登
富山縣	富山市	越中

鳥取縣	鳥取市	因幡、伯耆
島根縣	松江市	出雲、石見、隱岐
岡山縣	岡山市	美作、備前、備中
廣島縣	廣島市	備後、安藝
山口縣	山口町	周防、長門
和歌山縣	和歌山市	紀伊の内一市七郡
德島縣	德島市	阿波
香川縣	高松市	讃岐
愛媛縣	松山市	伊豫
高知縣	高知市	土佐
福岡縣	福岡市	筑前、筑後、豊前の内一市四郡
大分縣	大分町	豊後、豊前の内二郡
佐賀縣	佐賀市	肥前の内一市八郡
熊本縣	熊本市	肥後
宮崎縣	宮崎町	日向
鹿児島縣	鹿児島市	大隅、薩摩

沖繩縣

那覇區

沖繩諸島

兵備

兵役の種類

(兵備)

我國の軍隊は、世々天皇の統率し給ふ所にして維新前は全く武士を以て、これに充てたりしが、王政復古と共に、帝國の男子は、滿十七歳より四十歳まで、悉く兵役の義務を有することゝなれり。兵役は常備、後備、補充、國民の四種に分れ、常備兵役は更に現役、豫備役の區別あり、補充兵役も陸軍には第一補充兵役、第二補充兵役の二種あり、國民兵役も亦第一國民兵役、第二國民兵役に分る。

徴兵適齡は滿二十歳にして、此時初めて常備兵役に服し、後國民兵役となる。陸軍は全國より募れども、海軍は沿海地方及島嶼よりこれを採る。

常備兵役の現役は、陸軍三年、海軍四年、同豫備役は陸軍四年四月、海軍三

年なり。

後備兵役は、常備兵役終りたるものこれに服し、陸海軍共に五年なり。補充兵役の第一補充兵役は、七年四ヶ月にして、其年所要の現役兵員に超過するものこれに服し、第二補充兵役は、一年四ヶ月にして、第一補充兵員に超過するものこれに服す、海軍補充兵役は、一ヶ年にして、其年所要の現役兵員に超過するものこれに服す。

國民兵役は、満十七歳乃至四十歳にして、常備兵役、後備兵役及び補充兵役以外のもの及びこれ等の兵役を終りたるものこれに服す。

陸軍

陸軍の編制

全國の陸軍を、近衛及十二師團に編制す、一師團は、通常歩兵二旅團、騎兵一聯隊、野戰砲兵一聯隊、工兵一大隊、輜重兵一大隊より成る、而して一旅團は二聯隊より成り、一聯隊は三大隊より成り、一大隊は中隊より成る、一師團の兵は凡そ一万人あり、師團長は中將、旅團長は少將、聯隊長は大佐若く

は中佐、大隊長は少佐、中隊長は大尉これに當る。陸軍行政區劃は左表の如し。

師團	聯隊	警備隊	師管區
近衛	東京本郷、宇都宮、佐倉、水戸	東京府五區三郡、埼玉縣四郡、枋木縣、茨城縣、千葉縣	東京府十區五郡、南諸島、神奈川縣、山梨縣、群馬縣、埼玉縣五郡、長野縣
第一	東京麻布、高崎、橫濱、小笠原島	宮城縣一市十三郡、福島縣、新潟縣	愛知縣、三重縣二市十三郡、靜岡縣
第二	仙臺、新發田、柏崎、島佐、渡	大阪府二市六郡、和歌山縣、奈良縣、兵庫縣二郡、滋賀縣、三重縣二郡、京都府一市八郡	廣島縣、岡山縣十一郡、山口縣十郡、島根縣
第三	名古屋、豐橋、靜岡	大坂府二市六郡、和歌山縣、奈良縣、兵庫縣二郡、滋賀縣、三重縣二郡、京都府一市八郡	廣島縣、岡山縣十一郡、山口縣十郡、島根縣
第四	大津、和歌山、京都	大坂府二市六郡、和歌山縣、奈良縣、兵庫縣二郡、滋賀縣、三重縣二郡、京都府一市八郡	廣島縣、岡山縣十一郡、山口縣十郡、島根縣
第五	廣島、山口、濱田、道後、隱岐	大坂府二市六郡、和歌山縣、奈良縣、兵庫縣二郡、滋賀縣、三重縣二郡、京都府一市八郡	廣島縣、岡山縣十一郡、山口縣十郡、島根縣
第六	熊本、鹿兒島、宮崎、大村、五島、大島、沖繩、對馬	大坂府二市六郡、和歌山縣、奈良縣、兵庫縣二郡、滋賀縣、三重縣二郡、京都府一市八郡	廣島縣、岡山縣十一郡、山口縣十郡、島根縣

第七……札幌川函館路
 第八……弘前盛岡
 第九……金澤富山
 第十……福知山神取
 第十一……丸山高德知島
 第十二……小倉大分
 久留米佐賀

臺灣の守備兵は三の混成旅團あり、以上の師團中より交代衛戍す。

全國を三都督部に區分し、第一師團以下の十二師團を配當す、即左の如し。

都督司令部	所在地	管轄師團
東部	東京	第一 第二 第七 第八

砲臺

中部 大阪 第三 第四 第九 第十
 西部 小倉 第五 第六 第十一 第十二

砲臺既成の箇所は、東京灣、横須賀、紀淡海峽、下ノ關海峽、對馬淺海灣なり。出師、國防、作戰の計畫は、參謀本部に於てこれを司り、元帥ありて、大元帥の軍事に關する最高顧問となる。陸軍々人を養成するには、陸軍大學校、士官學校、中央及地方幼年學校、戸山學校、乘馬學校、教導團、軍醫學校、經理學校等ありて、教育總監部の監督するところなり。陸軍々人の總數は三十二万餘にして、軍屬は四千餘、明治三十年末調なり。

海軍

全國(臺灣を除く)の海岸及海面を、五海軍區に區劃し、每區に鎮守府を置き、數多の軍艦を分屬せしむ。

軍區	所管	軍港	區劃
第一海軍區	横須賀鎮守府	相模國 横須賀港	陸中國南九戸、北閉伊郡界より、紀伊國南牟婁、東牟婁郡界に至る海岸海面、及小笠原島の海岸海面。
第二海軍區	吳鎮守府	安藝國 吳港	紀伊國南牟婁、東牟婁郡界より、石見、長門國界に至り、又筑前、豊前の國界より、九州東海岸に沿ひ、日

第三海軍區 佐世保鎮守府

肥前國 佐世保港

向國南那珂、南諸縣郡界に至る海岸、及四國の海岸海面並に内海。

筑前、豐前國界より、九州の西海岸に沿ひ、日向國南那珂、南諸縣郡界に至る海岸海面、壹岐、對馬、沖繩諸島の海岸海面。

第四海軍區 舞鶴鎮守府
(目下工事中)

丹後國 舞鶴港

石見、長門の國界より、羽後、陸奥國界に至る海岸海面、隱岐及佐渡の海岸海面。

第五海軍區 室蘭鎮守府

膽振國 室蘭港

北海道、并に陸奥、及陸中北九戸、南九戸、兩郡の海岸海面。

舞鶴及室蘭鎮守府を設置するまで第四海軍區中、越後以東及第五海軍區を横須賀鎮守府に管せしめ、第四海軍區中、越中以西を吳鎮守府に管せしむ。鎮守府及艦隊に屬する軍艦は、總て四十七隻にして、此噸數凡そ十二萬なり、此他内外國に於て建造中の艦船少からず。

軍艦

- 富士 八島 鎮遠 扶桑 嚴島 松島 橋立
- 吉野 高砂 浪速 高千穂 秋津洲 和泉 明石
- 須磨 濟遠 千代田 比叡 金剛 平遠 筑波
- 高雄 八重山 天龍 葛城 大和 武藏 筑紫

鎮東、鎮西、鎮北、鎮南、鎮中、清國より收容せる軍艦なり

- 海門 天城 龍田 磐城 大島 摩耶 愛宕
- 鳥海 赤城 操江 鎮東 鎮西 鎮南 鎮北
- 鎮中 鎮邊 鳳翔 龍田 宮古

海軍の軍令部は、出師、國防、作戰の計畫を司るのみならず、又教育訓練を監督す。

海軍々人を養成する學校には、海軍大學校、海軍兵學校、海軍主計學校、海軍機關學校等あり、海軍々人の總數は二萬三千餘にして、軍屬は凡そ一千四百(明治三十年末調)なり。

外交

(外交)

紀元九百年代、神功皇后三韓を征し給ひしより、

外交の事益頻繁に赴き、一轉して支那との交通となり、其文物技藝を輸入せしこと少からず。

二千二百年代、ポルナユガルの商船來りて、通商せしより、スペイン、オランダ、イギリス人等も來るに至りしが、島原の

亂起りしに由り、徳川幕府は嚴に外國船の來航を禁じ、朝鮮、支那、オランダの外は交通全く絶ゆ。

二千五百十三年(嘉永五年)北米合衆國の使節ヘルリ來港せしより、イギリス、フランス、ロシア等の使節も來り、漸次交を諸外國に修む。現今の條約國は左の如し。

アジア 韓(朝鮮) 清(支那) 暹羅

ヨーロッパ イギリス フランス ドイツ オーストリア、ハンガリー

ロシア イタリア スペイン ポルチエガル

スウイツルランド ベルギー スウイデン、ノルエー

デンマルク オランダ

アメリカ 北米合衆國 メキシコ ペルー ブラジル

本邦人の海外に往來せしは、既に神武天皇以前に始れり、而して神功皇后三韓を征服し給ひてより、彼地との交通頻繁となれり、隨ひて支那の工藝、學術を始め、風俗宗教に至るまで、朝鮮を経て、我邦に來れるもの甚だ多

く、其後朝鮮との交通中絶せる時にも、支那とはなほ絶えざりき、足利時代以後、世はかりごとと亂れ行き、英雄割據の間に處し、志を内地に得ざりしもの、奮躍一番、多くは外商となり、支那の海岸より、アナム、シヤム、ルソン、マラッカ、インド等に通商するもの多く、堺港、博多港等其根據たりき。

二千二百年代にポルチエガルの商船、九州に漂着し、通商を求めてより、スペイン、オランダ、イギリス等の商人、相次ぎて來り、貿易を始めしが、これと共に傳はりし基督教の弊害、甚しきを見て、豊臣氏先づ其教徒を放逐せしかど、徳川氏の時に至り、竊に來りて、布教に従事するもの多く、たゞくオランダ人、基督教徒の禍心を抱くを告げしかば、幕府大に嚴制を設けて、我國に來ることを禁じ、且我國人の外國に往くことをも禁せしにより、外交全く中絶しぬ。

二千五百十三年、北米合衆國の使節ヘルリ、浦賀に來りて、通商を請ふに及び國禁を解きて、長崎、下田、函館三港を開き、後下田に換ふるに横濱、神戸、新潟を以てし、更に又大阪を加へ、以て今日に至れり。

第四章 生業

山林業

舊幕時代は林政嚴なりしに維新の際濫伐の弊を生じた

全國を十大林區に分つ

(山林業) 我國は到る處多少の森林ありて、林産尠からざるのみならず、大に其地の景色を添ゆ、且森林は氣候の調和、水源の涵養に必要なるものなれば、政府は林區を設け、林務官を置きてこれを保護す。

森林の最も大なるものは、木曾(信濃)にして、檜最も多く、陸奥、羽後、上野、下野、越中、伊豆、伊勢、大和、紀伊、日向の諸山林には、松、杉、檜、樺、樅の良材あり。

全國の山林は御料林、官林及民林の三種に分ち、總反別一千五百餘万町あり。

牧畜業

肉食年に益盛なるを以て牧畜の要愈大なり

(牧畜業) 牧畜は他の生業に比すれば、未だ進歩せず、畜産の重なるものは牛馬にして、豚、家禽等これに次ぐ。

牛の産地は九州及中國にして、但馬牛殊に名あり、馬の産地は奥羽及九

州にして南部馬最も名高し、明治二十九年末現在は左の如し。

牛 百十四万九千七百六十一頭 馬 百五十七万八千百十七頭

水産業

遠洋漁業をなすもの少し

(水産業) 我國は四面海を繞らして、頗る魚介、海藻に富み、北海道の沿海は世界三大漁場の一に居る。然るに従來漁獵を業とするもの少く、且つ漁具不完全にして、斯業の發達甚だ微々たり。

水産物中、鯿、鮭、鱒、鱒、鯨、臘、臍、昆布等は北部に多く、鯉、鯽、鮪、烏賊、鯨、海苔等は南部に多し。

漁業の重なる地方は北海道の沿海、房總半島の沿岸及長崎縣の近海なり、又乾物鹽物等は年々支那國等へ輸出少からず、其價格凡そ三百万圓なりとす。

製鹽は瀬戸内海地方に最も盛なり、所謂十州鹽田とはこれなり。これ主として天然の地形により、氣候乾燥、雨量少き

製鹽

支那に輸出するもの最も多し

農業

農産物

に基くなり。

明治二十九年の産額は、五百二十三万五千二十四石にして、此價格七百六十二万六千六百十六圓に達し、内國の需用を充すのみならず、外國への輸出も多少年々増加す、而して其最も産額の多きは山口縣にして九十一万石之に次ぐを香川縣の八十七万石、兵庫縣の六十四万石、廣島縣の五十一万石、岡山縣の四十九万石、徳島縣の三十八万石、愛媛縣の二十八万石とす。但し價格最も多きは廣嶋縣にして百六十万圓餘なり。

(農業)

我國は氣候温和にして、地味も亦肥沃なれば、農業夙に開け、農民の如きは、全國人口の凡三分の二を占め、耕地凡五百万町歩あり。

農産物の重なるものは、米にして、麥これに次ぎ、其他大豆、甘藷、實綿、藍等の産額多し。

米の産出の割合多き地方は、木曾川平原を第一とし、筑後、備前、讃岐、大阪

養蠶

製茶

鑛業

近傍の地、及利根川水域、並に神通川水域、千曲川水域等これに次ぎ、東山道、山陰及九州南部の地は最も少し、全國の總産額は三千三百餘万石なり、明治三十年は全國各地多少の蟲害風水害を蒙りたるに由り、最近五ヶ年の平均高より六百餘万石を減じたり、麥の産出は利根川水域を第一とし、尾張、備前、讃岐及九州の西北部これに次ぎ、山陰及北陸、奥羽の地は少し、全國の總産額は一千八百餘万石なり。

養蠶は近年頗る盛大に赴き、中仙道及東北地方は殊に盛なり、生絲は外國貿易上第一の輸出品なり。製茶は製絲に次ぎて盛なるものにして、畿内近傍及東海道地方に行はれ、過半は外國に輸出す。

明治三十年の輸出額は生絲類一千一百二十九万九千八百二十三斤(元價五千八百六十五万餘圓)茶類三千二百六十三万二千六百八十三斤(元價七百八十六万餘圓)なり。

(鑛業)

本邦は地質の複雑なるにより、鑛物の種類多く、

近年採鑛法の改良進歩に伴ひて、産額は著しく増加するに至れり。中に就き、石炭及銅の産額最も多く、銀、鐵、金、硫黃、アンモニア等これに次ぐ。

石炭は九州の西北部、及北海道の西南部より多く産出し、總額五百餘万噸、アジア洲中には其産額第一に位し、單に内國の需用を充すのみならず、支那其他諸國に輸出す、其額二百餘万噸、價格一千一百餘万圓に達す。銅の産出多きこと世界中第三に位し、年額三千三百餘万斤、外國に輸出するもの亦多し、産地は下野の足尾、伊豫の別子等を以て最も有名とす。

礦泉は火山近傍に多し、温度の高低によりて、温泉、冷泉の別あり、又其水に溶けたる礦物の性質により、硫黃泉、炭酸泉、鐵泉等に分つ、中に就き本邦には硫黃泉最も多し。

(工業) 從來我國の工業は、多くは、手工を以てせしによ

礦泉

我國の如く礦泉に富む國は稀なり

工業

り、規模亦小なりしが、維新以來大に西洋の器械を輸入し、近年に至り、益々大工業を見るに至れり。而して其主なる工業會社の中、製絲會社は最も多く、織物會社これに次ぎ、其他鑄物、金屬、摺附木、煉瓦、陶磁器、製紙、造船、セメントに關する會社等種々あり、酒、麥酒、葡萄酒等の醸造會社も亦少からず。

製絲は養蠶業の行はるゝ地方に多く、綿絲紡績は大坂府、岡山縣等に盛大にして、明治三十年産出の綿絲總額、二千六百万貫に達す。

機械業の盛なるは本州の中央部にして、京都、桐生、足利、福井の如きは、有名なる機械地なり、明治二十九年産出の織物總價格は、殆んど一億圓に及ばんとす。

陶磁器製造業は愛知、佐賀、石川の諸縣に盛にして、漆器製造は漆樹の特産地たる中國以北の地方に盛なり。

製紙業中和紙の製造は高知縣最も盛なり、洋紙の製造も近年大に發達し、東京、神戸等に盛なり、摺附木製造は各地甚だ盛なれども、これ、又東京、神

二十七八年戰役後工業大に起る

戸を推す。

酒類醸造の盛なるは兵庫縣、福岡縣、愛知縣、長野縣等にして、醬油製造業は殊に千葉縣に盛なり。

商業

(商業)

我國は古來農業を以て、立國の大本とし、商工業はこれを等閑に附したりしも、近年人口の増殖甚しく、交通の便大に開くるに至り、内外の商業漸く隆盛となれり。

商業に内國商業と外國商業との別あり、内國商業に於て、取引の最なる貨物は米にして、清酒、麥、甘藷、豆類、生絲、織物、茶等これに次ぎ、石炭、木材、魚介、陶器、紙等亦これに次ぐ。

内國商業地の最も繁華なる處を舉ぐれば、東京、大阪、名古屋、仙臺、廣島、函館、徳島、福島、福岡等とす。東京は内外貨物の聚散地にして、大阪には關西の商品輻輳す、これを我國の二大

内國商業

商業地となす。

商工業をして充分發達せしめんが爲に、近來銀行、會社の設立多く、金錢の融通運轉に便なり。

銀行は日本銀行を首め、國立、私立銀行本支店を合せ、其數一千五百餘あり、日本銀行は全國の財政を整理し、正金銀行は横濱にありて、海外貿易を調和す、其他勸業銀行、農工銀行等あり。

政府は發明特許、意匠登録、商標登録等の法を設け、勸業博覽會、共進會等を開きて、大に商工業を奨励し、各地方には商業會議所及取引所の設ありて、専ら商業の進歩を圖る。

外國貿易

輸出品

外國貿易は大に進歩し、輸出入總額は年々増加せり。輸出品の第一位を占むるものは生絲にして、これに次ぐを絹布類、茶、米、石炭、銅、摺附木、魚介等とす。其重なる得意先は北米合衆國を第一とし、フランス、香港、支那、イギリス、イギリス、印度、

朝鮮、ドイツ、イタリヤ、ロシア領アジア等これに次ぐ。其輸出額の最も多きは北米合衆國にして、五千二百餘万圓に及ぶ。

北米合衆國	—— 生絲、綠茶、絹布、米	支那	—— 綿絲、石炭、摺附木
香港	—— 綿絲、石炭、摺附木、銅	イギリス	—— 絹布、麥稈サナダ
フランス	—— 生絲、絹布類		

輸入品

輸入品の重なるものは綿類を第一とし、米、砂糖、綿絲、金屬及金屬器、石油、毛布及毛織物等之に次ぐ。輸入國はイギリス第一に居り、イギリス領印度、支那、北米合衆國、ドイツ、香港、朝鮮、フランス、ベルギー、スウイツルランドこれに次ぐ。其價額の最も多きは六千五百餘万圓なり。

イギリス	—— 織物、綿織絲、鐵類	ドイツ	—— 砂糖、毛絲、羅紗
イギリス領印度	—— 綿花、乾藍	北米合衆國	—— 石油、綠綿
支那	—— 綠綿、米、豆類		

前既に述べたるが如く、外國貿易の年々盛大に趣くは賀すべきことなれども、二十七八年戰役後は頗に輸入の超過を來せり、これ將來大に注意せざるべからず。

年次	輸出	輸入	ハ輸入超過
明治二十五年	九一、一九九、四六六	七五、九八二、三〇〇	
明治二十六年	九〇、四三四、二二六	八九、四三〇、八二一	
明治二十七年	一一三、七〇八、五八七	一二一、二四五、五九四	
明治二十八年	一三七、四九四、六一七	一三八、七四五、二九五	
明治二十九年	一三一、一二六、六五一	一八八、七一八、九七四	
明治三十年	一七七、八七五、四九七	二七四、一七〇、五〇三	

貿易港

普通貿易港は横濱、神戸、長崎、新潟、函館、大阪の六港にして、條約國と普通の貿易をなすことを得べし。朝鮮に限られたるは、下ノ關、博多、嚴原、鹿見、佐須那の五港なり。米、麥、麥粉、石炭、

硫黄等指定の物品に限りて、外國へ輸出すること、朝鮮及びウラジナストックに限られたるは宮津にして、支那に限られたるは那覇なり、許されたる特別輸出港は、四日市、三角口、津、唐津、博多、門司、下ノ關、伏木、小樽、釧路、室蘭なり。

以上の貿易港中其首位を占むるは横濱及び神戸にして長崎これに次ぐ。博多、唐津、濱田、敦賀、口ノ津、清水、七尾、境は又特別輸出入港なり。

臺灣の貿易港は基隆、淡水、安平、打狗にして茶、砂糖、樟腦は輸出品の重なるものなり。蘇澳、舊港、後壠、梧棲、鹿港、東石、東港、媽宮は又特別輸出入港なり。

交通

帝國臣民其所
有の船舶にて
輸出をなす
と得るの特
別の規定ある
港を特別輸出
入港と云ふ

(交通)

交通の便否は國の進歩に影響すること大なり、維新以後諸所の險阪を鑿ち、鐵道を敷き、航路を擴め、郵便電信を設け、電話を通じ、僅に三十年にして全く面目を一新するに至り。

道路

道路に三種あり、國道、縣道、里道これなり、國道は東京より道廳、府縣廳、各開港場並に伊勢大廟に達するもの、及道府縣と師團本部及び鎮守府とを連絡するものをいひ、縣道は各府縣を連接するもの、師團より分營に通ずるものをいひ、里道は此他の通路をいふ。

國道は道幅五間乃至七間にして、縣道は四間乃至五間の規定なり、里道は一定の道幅なし。

臺灣の道路は、最も不完全にして、我國內地と大差あり。

鐵道

我國の鐵道は、明治五年、東京と横濱との間に設けたるを始とす。爾來線路の延長は年々増加し、既に開業せるもの、三千三百哩に及び、即ち本州の縦貫線は、北方青森より南方三田尻に達し、九州に於ては、門司より八代に至り、北海道に

於ては、岩見澤より空知に及びべり。而して之を横ぎるべき横貫線は、甚だ多からずと雖も、北海道には、手宮と室蘭との間に一線あり、本州に於ては、東京直江津間に一線ありて、沼垂に延長し、名古屋、福井間に又一線ありて、金澤に延長し、姫路、生野間の一線も、又將に中國を横斷せんとし、武雄、鳥栖間は既に開通して、佐世保に連絡す。此他一部の目的に供せらるゝ小線路は甚だ多し。

臺灣の鐵道には、基隆より新竹に至れるものあり、これ亦漸く延びて縦貫鐵道をなすに至らむ。

航路

我國は島國なるを以て、水運の業も維新後漸々發達し、船舶の數大に増加し、航路標識の設あり、海上保險の法ありて航海の術頗る進歩す。

二十七八年戦役の後に航路の擴張を見る

沿海諸港へは大抵、定期航海あり。外國へも航路を擴張し。東は北米合衆國、西は印度及ヨーロッパ、南はオーストラリアに至るまで皆定期航海を始む。明治三十年末には西洋形船舶の數千七百餘艘、三十二万噸に垂んごす。

航海を業とせる會社にては、日本郵船株式會社最も大にして、大阪商船株式會社これに次ぐ。日本郵船株式會社は政府保護の下にあり、資本金は一千八百七十万圓にして、汽船の數九十三、噸數十六万餘、馬力殆んど一万五千、横濱を中心として、西は四日市、神戸、長崎、臺灣、上海、芝罘、天津、牛莊、香港、朝鮮諸港及ウシラオストツク等に至り、東は萩の濱、函館、小樽、根室、千島列島を往復し、近年海外に定期航海を開くに至れり。

大阪商船株式會社は資本金五百餘万圓にして、汽船の數六十九、噸數二万六千餘、馬力殆んど五千、大阪を中心とし、専ら多度津、宇和島、宇品、馬關を経て境に至り、又徳島、和歌山等の間、大阪、朝鮮、及び鹿兒島、琉球、長崎、臺灣間を往復す、近來支那揚子江の航路を開きたり。

郵便

燈臺其他航路の標識、太平洋面に多くして、日本海面に少し、これ其岬角の出入、島嶼の散布、太平洋に多く、日本海面に少なきを以てなり。郵便の制度は明治四年に始まり、今は全國到る所に線路開通し、大に便益を得るに至れり。

明治十年六月、万国郵便聯合に加盟してより、郵便電信局一千八十六、郵便局二千六百五十九、明治三十一年三月調の多きに至れり。

電信

電信は明治二年始めて東京、横濱間に架設し、それより、全國に及び、今は國內主要の市邑は概ね電信局を見るに至れり。但本州と九州、本州と四國、本州と北海道、本州と佐渡、隠岐、九州と四國、臺灣とは各海底電線によりて相通じ、又九州と壹岐、對馬とは朝鮮に通ずる海底線によりて便を得。

上海より我邦に來れる電信線は海底線となりて長崎に出で、又長崎よりウラジオストクに達せり。

前に記せる郵便電信局の外、電信局四十、線條延長一万八千三百六十里

(明治三十一年三月調に及べり)

電話

電話は明治十八年に架設したるを始めとし、今は東京、横濱、大阪、神戸、名古屋、堺、福岡、馬關、京都等、其他市邑の一部に行はれ、電話交換加入者五千三百二十六、線條延長六千七百三十七里、明治三十一年三月調に達せり。

結論

我國は、アジア大陸の東部に、羅列する島國にして、西には上古より交通せる朝鮮、及土地の廣大なる支那あり。北は一葦水帯を挾みて、ロシア領シベリアと對し。東は太平洋を渡りて、アメリカ合衆國に至るべく、南はマレイ群島、及オーストラリアに達すべし。

面積は、二万七千六十餘方里にして、支那及ロシア領シベリアに比すれば、狹小なるも、朝鮮よりは大にして、海岸の屈折甚しく、港灣隨て頗る夥し。

我國は、支那、樺太の兩山系、南北より來りて、中央に會し。富士帶火山脈、これを貫通するを以て、到る處山岳峙ち、河流多

し、大陸の如き絶大の山岳に乏しきも、頗る風致を添へ、交通を遮斷せず。河流は長大ならざるも、其灌域は概ね肥沃にして、穀菜の産に富む。

我國は、北緯凡そ二十一度より、同五十度に亘り。沿岸は、日本海流及對馬海流に洗はるゝを以て、過半は寒暖中和を得て、アジア洲中同緯度の諸國に比すれば、稍温和なり。是を以て動植繁殖し、佳景の地多く、東洋の花園と稱せらる。

かく土地肥沃にして、氣候温和なるにより、穀類の産額甚だ多く、牧畜漸く盛んならんとす。山岳は木材と、鑛物とに乏しからず。沿海は漁鹽の利、極めて大にして、殆んど無盡藏の觀あり。

國民は、總べて四千五百餘方に達し、支那には遠く及ばざ

れども面積に比例すれば、其右に出で、年々平均四十餘万の増加を見る。職業は、農業に従事するもの最も多く、商工業者は甚だ少し。然れども限ある國土は、其生産力も自ら限らるゝを以て、今後は大に商工業を、奨励せんことを要す。

貿易は、近古稍發達の端を開きしも、偶鎖國の禁制あり、殆んど中絶せしが、維新後頗る長足の進歩をなし、二十七八年戦役後は、大に世界各邦の注目するところとなり、貿易總額は四億圓に達す。彼のシベリア大鐵道完成の曉は、更に幾多の影響を與ふるや必せり。我國の前途、頗る多望なりといふべし。

我國は、近年立憲帝政國となり、立法、司法、行政の各部機關、悉く完備す。元首は即万世一系の天皇にして、列聖仁慈に在

しまし、臣民は、極めて忠實よして、万國無比の國體を成す。開國以來二千五百餘年、未だ嘗て他邦の凌辱を蒙らず。威武益異域に輝けるもの、誠に以ある哉。

新撰地理 日本之部終

明治三十二年二月廿六日印刷

(新撰地理日本之部)

明治三十二年三月九日發行

定價金四拾錢

編纂者 山上萬次郎

發行者 東京市神田區裏神保町九番地
合資會社 富山房

代表者 合資會社富山房社長
坂本嘉治馬

印刷者 東京市日本橋區藥研堀町三拾三番地
仁科衛

印刷所 同厚信舍

(電話浪花一四六番)

發兌元

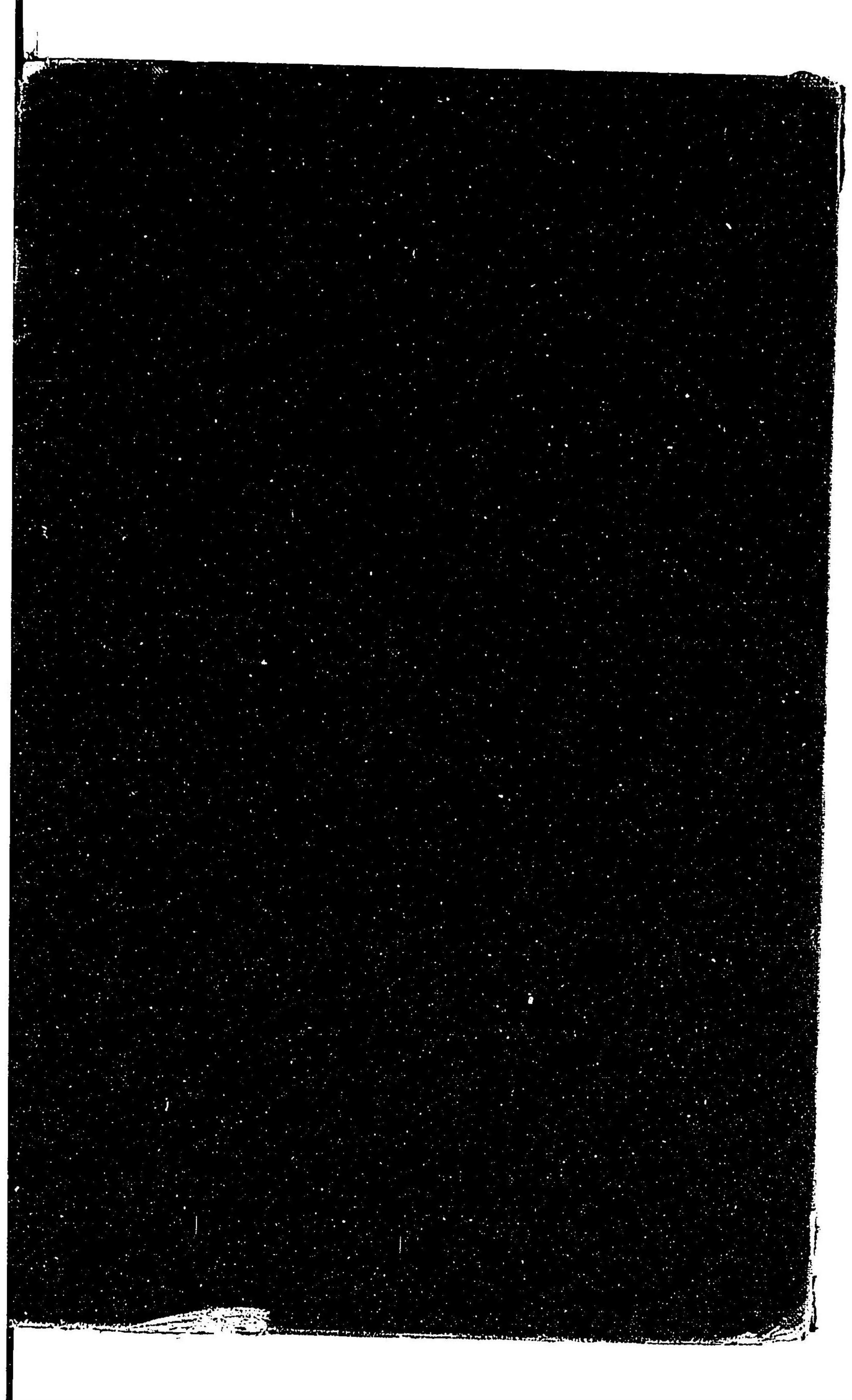
合資會社 富山房

山房

(電話本局一〇三六番)



84
51



84
51

022118-001-1

84-51

中等新撰地理

山上 万次郎 / 編

M32

ADA-0500



